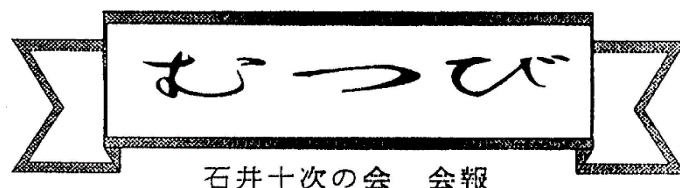


2026 年
(令和 8 年)
8 月 13 日



347 号

受け継ぎ — 引き継ぐ

宮崎県教育研修センター 企画課 課長 明松 美佳

宮崎県教育研修センターでは、「郷土の偉人」をパネルにして掲示しています。その一つに「児童福祉の父 石井十次」の姿もあり、紹介文には、次のような一文があります。——「社会福祉、児童福祉といった概念をいち早く打ち立て、実践していった十次の意志は、今も茶臼原（ちゃうすばる）（西都市）の大地などで引き継がれています。」

昨年度、茶臼原小学校の校長として勤務した 1 年間は、まさに「十次の意志が引き継がれている」と感じる日々でした。着任前の私にとって「石井十次」は、パネルや郷土資料の中にいる歴史上の偉人であり、遠い存在でした。しかし、茶臼原小での生活が私に大きな変化をもたらしたのです。

パネルの中の「石井十次」は、いつしか私にとっては「十次先生」となり、学校経営について悩む時には、写真から声が聞こえてくるように感じることもありました。「息づく」という言葉の意味を実感したのです。

あらゆる時に「息づいている」と感じるのは、なぜだろう。茶臼原小の礎が十次先生の私設学校にあるからなのか。—— いつも考えていました。私はようやく、その答えにたどり着くことができたのです。茶臼原小の児童、保護者や地域

の方々に、学校の教育理念でもある「相信相愛」という十次先生の教えが受け継がれているからなのです。茶臼原小に在籍する児童は、個性豊かです。しかし、それぞれの個性を、互いに受け入れ、認め合い、尊重する姿がありました。保護者の方々も同じでした。茶臼原小の保護者の多くは、卒業生です。子どもたちと同じように、相信相愛の教えによって教育を受けてきた方々です。だからこそ、他者を寛容に受け入れる ―― その寛容さが、この地の風土となって根付き、子どもたちへと引き継がれているのだと気づいたのです。また、茶臼原が開拓の地であることも理由の一つだと思います。開拓の理念とともに、他者を受け入れ助け合いながら新たな挑戦をしようとする志や風土も受け継がれているのです。

「十次の意志が引き継がれている」 ―― 今、パネルの前に立ち、その言葉に込められた思いを改めて実感しています。

石井十次資料館を訪れ、十次先生の功績を学ぶと、教育を大切に考えていらしたことがわかります。子どもたちの安心・安全な生活環境を整える福祉と、子どもたちの未来を支える教育は一体でなければならないと感じています。宮崎日日新聞の記事（R8.6.2）で、友愛園卒園生の大学進学率の増加について取り上げられ、うれしく拝読しました。私自身、これからも十次先生の教育者としての考え方を受け継ぎ、子どもたちのためにできることに取り組むことで、次の世代に引き継いでいこうと考えています。

県教育研修センターでの教職員研修においても、茶臼原小での経験をもとに、地域と学校が一体となって子どもたちの成長を見守っていくことの大切さを伝えていきます。

つながりを深めた幼少期の遊び

いつだったか、女の子とおじいちゃんが楽しそうにトランプで神経衰弱というゲームをやっていた。いつもはお絵描きやおもちゃ遊びをしている女の子が、その日ばかりは神経衰弱にすっかり夢中になっている。「あれえ、どこだったかな、教えて。」「これとこれかな。」「おじいちゃん、がんばって。」などの賑やかなやり取りが飛び交い、部屋にはじけるような笑い声まで聞こえてくる。このほのぼのとした微笑ましい様子を眺めていると、ふと私の幼い頃の昔の遊びが鮮やかに思い出される。

昔(昭和 30 年代)は、幼児から小学校の高学年までが一緒になって近所の子どもたち全員で同じ遊びをしていた。ルールは至ってシンプルなものばかりなので、小さな子どもでも参加しやすいのが大きな魅力だった。また、身の回りにあるもので簡単にできる遊びも多く、工夫次第でいくらでも新しい楽しみ方を見つけることができた。特に私たちの遊び場といえば、校庭や自分の家の庭、あるいは田んぼくらいだった。その限られた空間の中で印象深い遊びはパッチン（めんこ）、鬼ごっこ、ゴム銃作りなどだ。

学校の帰り道、お小遣いの 10 円玉を握って駄菓子屋さんへ向かい、シート状になった厚紙が長方形や丸形にくり抜かれているめんこを買う。その遊び方は、みんなのめんこを地面にばらばらに置き、その中の一つに自分のめんこを勢いよく打ち付ける。そして、風の力を上手く利用して相手のめんこをひっくり返すのだ。地面に激しく打ち付ける時の歯切れのよい音から、私たちの間では「パッチン」と呼んでいた。裏返ったパッチンは自分のものになるルールだった。遊ぶ度にパッチンが一枚、また一枚減ってしまう。そこで考えついたのが、厚紙を幾重にも重ねて重くしたりサイズを大きくしたりすることだった。子どもながらに知恵を絞って次の戦いに臨んだものだ。私の家では、何度も新しいものを買ってもらえるわけもなく、あちこちから厚紙をかき集めては手作りした。パッチンのうまい子は技ありの術で 30 枚も 40 枚も集めることができる。その術を学ぼうと兄と二人で足の位置やパッチンの投げ方など工夫を凝らしたものだ。

パッチン以外にもみんなで夢中になったのは鬼ごっこや缶けり、陣取り、ゴムとびなどである。これらの遊びの際には、ルールをまだ理解しきれない小さい子どもでも、「みそ（みそっかす、おまけ）」などの特別ルールを設けて仲間に入れて遊んでいた。今思えば、本当に温かくほほえましい光景だった。鬼ごっこでは、鬼からどこに逃げるのか、鬼はどうやって攻めるかななどをみんなで声を掛け合って考えることがとにかく楽しかった。

ほかにも、自分で木を削ってゴム銃を作ったり、榎の実鉄砲を作って射て遊んだりもした。時には、小さな紙に塩を包んでポケットにそっと忍ばせ、野山へ出かけることもあった。道すがらに生えているスイコギ（スイスイゴンボ）やイタドリ（サドガラ）をポキンと採っては、その塩を少しつけて酸っぱい味を楽しんだ記憶が、今でも懐かしくよみがえる。

昔の遊びは、体を目一杯動かすだけでなく、頭や心の土台をじっくりと育ててくれるものが多いと言われている。また、同級生という「横のつながり」だけでなく、年齢の違う先輩や後輩といった「縦のつながり」を自然と深くしてくれる、大切な学びの場でもあったのだと思う。



むつび編集委員としての所感(その2)

「むつび通信」は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人、団体に毎月送付されている。その中には、海外(アメリカ3名、フランス1名)も含まれている。

きっと、日本からの毎月の「むつび通信」を楽しみにされていることだろう。宮崎県内外の方からも、月1回の「むつび通信」を心待ちにしているとの声が届いた。

前回も述べたが、総会での「経費削減上から隔月発行にしては」の意見に対しては、これまでどおりを強く切望する。

因みに、数年前の児嶋草次郎理事長による「ゆうあい通信」を読み直し感動した。

また、「むつび通信」では宮崎市・溝尻輝政氏の令和5年5月号「友愛社で過ごした春夏秋冬は夢が叶うための礎でした。」の玉稿にも心が震えた。

このように、紙媒体の印刷物だからこそ直に手に取って読める喜び・感動は格別である。

「ネット配信等に切り替えてはどうか？」との意見もあるが、実はもう既に、「むつび通信」も「ゆうあい通信」もネット配信されている。

どうぞ会員の皆様はネット配信と紙媒体の印刷物を上手に活用していただきたい。

編集委員として微力ながら、これからも十次の愛の心を伝えるために紙媒体の発行活動に努めたい。

むつび編集委員 徳地順子



方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介(敬称略)

【県外】塩月 崇雄 【宮崎市】三浦 和夫 【高原町】山下 香織

☆9月の発送作業は9日(水)10日(木)両日ともに9:00からです。

*ここまでの掲載者は編集等の都合により7月20日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

☎ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭言は、明松美佳様よりいただきました。わずか1年の茶臼原小学校校長職にもかかわらず「相信相愛」の教えの基に地域に根ざした取り組みの姿がよく伝わります。新天地でのご活躍を祈念します。玉稿ありがとうございました。

(編集委員 徳地 順子)